

特集「ナショナリズムの表現」：「日本」と「国益」：その複数の意味

著者	田中 優子
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	8
ページ	127-137
発行年	2010-08-10
URL	http://doi.org/10.15002/00022629

「日本」と「国益」——その複数の意味

田中優子

富士山の張り抜き

平賀源内が1763年に刊行した『風流志道軒伝』には、「富士山の張り抜き」という概念が出てくる。「富士山の張り抜き」は、主人公の深井浅之進（あさのしん）が中国滞在中、中国皇帝に作ることを約束した作り物のことなのだ。土で築山を築き、その上に紙製の富士山の張り抜きをかぶせる。するとただの土が富士山になる。形は日本、中身は中国。これはまるで江戸文化を象徴しているようだ。中身は日本、外は中国。あるいは、起源は中国、見かけは日本、である。

もうひとつ、『風流志道軒伝』には作者の重要な主張がこめられている。それは「権威」と「コマーシャリズム」についてである。富士山は古代から江戸時代にかけて、様々にその存在の意味を変えてきたわけだが、江戸時代に至って、ある種の権威であるとともに、コマーシャリズムにもさらされていた。「富士山の張り抜き」は、歴史を積み重ね、様々な意味と機能を十分に持っていながら、見世物（エンターテインメント）として商品化され消費されてしまう人やものをも、示しているのである。

富士の「人穴（ひとあな）」つまり火山の溶岩トンネルには、13世紀からの伝説がある。人穴の中には大河があり菩薩がいると言われ、冥界への入り口であると同時に、「胎内めぐり」という言葉どおり子宮でもあった。富士は生と死を司る山なのだ。江戸時代に成立する富士講の教義では、富士の内部には特別な文字で現す父と母が入っており、それはイザナギ・イザナミでもあり、火と水であり、土と金でもあり、この対が交わって、富士山から万物が産み出さ

れた、という。富士は世界の中心にあって世界を生み出した山なのである。これは仏教の須弥山の見立てであり、中国の蓬莱山の見立てだ。富士は古代から江戸時代まで、生命と世界の根源とみなされていたのだった。

『万葉集』において富士はすでに霊峰であり、それは9～10世紀に成立する『竹取物語』に受け継がれる。『竹取物語』では、かぐや姫を慕う天皇が富士の頂上で手紙と不死の薬を燃やさせる。このとき富士は不老不死の象徴であった。また別の説では、かぐや姫を慕う国司が富士に上ると、頂上には池があり島があり宮殿があって煙が立ち上っている。国司は身投げをする。その煙を「不死の煙」といった。その後、かぐや姫と国司は神となって富士浅間大菩薩となる。九世紀の『日本霊異記』では、役行者（えんのぎょうじゃ）が昼は配所にて、夜は富士の頂上で修行した、とされる。平安時代初期の『聖徳太子伝暦』は、聖徳太子が甲斐国から献上された黒馬で富士山の頂を跳ぶ、という話だ。これは聖徳太子の霊峰をも超える能力に富士山が利用されているわけだが、同時にその聖性を共有しており、やはり山岳信仰の現れである。

『伊勢物語』『更級日記』などの時代になると富士は「あづま」を表現する意匠になり、その裾野は巻狩りの場として使われる。が、その巻狩りは曾我兄弟の仇討ちの場所として新たな意味を帯び、その意味は歌舞伎にまで引き継がれて行く。その経過の中で、謡曲では『富士山』『羽衣』が作られ、狩野元信は『富士参詣曼荼羅図』を描くなど、やはり山岳信仰の場所としての聖性は失われていない。実際に、信者たちによる富士登山は中世からおこなわれ、近世ではますます盛んになるのだった。

注目すべきは、中国とのかかわりから出てくる「日本の」山としての富士山である。謡曲『富士山』のシテは富士の山神であり、ワキは中国の王から遣わされた「せうけい」以下三人の中国人である。不老不死の薬を求めて日本にやってきた徐福を引き合いに出しながら、その遺跡を尋ね歩いているのだという。こうして富士は一方で京に対するあづま（東）の象徴となり、同時に、山岳信仰の意味合いを失わないまま、中国の信仰を集める山々と対比されて「日本の」山として表現されるようになってゆく。1558年、角行は富士周辺で数年に渡る修行をして新たな富士信仰が興り、1733年に富士で断食修行した身禄の入滅をきっかけに、各地に富士講が作られる。富士講信者が登山する富士

塚は関東一円に広がった。

富士講は関東の信仰であり、日本の信仰には成り得なかった。にもかかわらず、山岳信仰、江戸の象徴、日本の象徴と、重なりながら変化する富士のイメージの変遷がそこには見える。山岳信仰はアジア全体に広がる信仰のかたちである。富士信仰はそのひとつと位置づけることができる。そのアジアの山岳信仰につらなっていたものが、やがて鎌倉、江戸の幕府の登場によって関八州の信仰となり、さらに中国、ヨーロッパから盛んに物や情報が導入される近世になると、日本の外と対比されて日本の象徴となる。これを具体的に言えば、山岳信仰は、山の恵み、森林や海の恵み、農耕に不可欠な水分（みくまり）神などを必要とする人々が、それぞれの地域で生きるための信仰である。しかしその山岳信仰は、日本の中心が東に移動するに従って西国に対する東国の象徴、京都に対する江戸の象徴となる。さらに、中国を強く意識する江戸時代に入ると、中国の五嶽に対する日本の富士を、日本の象徴とするようになった、ということなのだ。

江戸時代になると、富士は盛んに絵画や浮世絵に描かれるが、それは富士が単なる景色ではなく、その背後に自然信仰と、仏教的な極楽浄土（江戸の西にある）と、インドの須弥山と、中国の蓬莱山と、実質的な首都である江戸の背後にある天皇の住まう真の首都、京都を指し示し、さらに中国に対する「日本」を意味していたからである。タイモン・スクリーチは、「日本橋の上からは、まず蔵（豊穡）、そして城（平和）、さらには富士（不老不死）が見渡せ、その向こうには実際には見えないが京の都（太古）、そしてさらには至福の極楽浄土が続いていたのである」（スクリーチ、2007）と書いている。

富士のイメージの変遷を見渡したところで、『風流志道軒伝』に戻ろう。

深井浅之進は、浅草観音の申し子として生まれたので浅之進という。ここには「江戸」を強調する仕掛けがある。『風流志道軒伝』は1763年に刊行された。この2年後、江戸は新しい浮世絵・吾妻錦絵の開発によって文化の中心地になる。武士たちが使う学問の本や、江戸特有の絵をふんだんに使った本の出版で、やがて出版の中心は京都から江戸に移る。歌舞伎や小唄は上方と江戸相並ぶが、浄瑠璃を除いて様々な文化が江戸を中心に展開するようになる。オランダ人も長崎から京都を経ずに江戸に来るので、江戸は蘭学の発展地でもあった。平賀

源内が高松藩士であるにもかかわらず、大坂を経由して江戸に暮らすようになったように、幕府や諸藩とつながりを持つとする藩士たちにとっても、江戸はネットワークの要であった。現代から見ると江戸文化の存在は当たり前のように見えるが、『風流志道軒伝』の時代、まだ中心は上方であり、まさに平賀源内の時代に（あるいはその存在を契機にして）、日本は江戸を中心に回り始めるのである。それは日本イメージや日本意識もまた、江戸的なものを經由して形成されるようになる、という意味であった。

江戸とは具体的にどこをさすか、という問題も確かに重要だが、ここではそのことに深入りしない。『風流志道軒伝』にとって江戸とは江戸城でも日本橋でもなく浅草であった、ということだけ念頭に置いておく。

浅草観音の申し子（ということは、浅草そのものの象徴）である深井浅之進は、仙人からさずかった羽扇で自由に世界を飛び回った。飢えもせずに空を飛び、海中を移動し、「諸国の風流をながめつく」したのである。気が付くと「身の長（たけ）二丈あまり」の人々が暮らす国に着いていた。「背におふたる子の形も日本人より大なれば」と、ここに「日本人」という表現が出現する。浅之進は「我は日本の者なり」と名乗る。結果的に捕らえられて「生きた日本人の見せもの、手に入れて這はず様なちつぽけな美男、作物こしらへものとはふて、生の物を生で見せる、御評判、御評判」と、両国橋の見世物なみに扱われる。たまたまなくなって羽扇で飛び立てば、口ぐちに、「是まで日本人の飛行する事聞き及ばず。是は定めて日本に沢山なる天狗にてやあらん」と騒ぐのだった。「日本人」が強調されている。しかし強調されているだけではない。ここに「日本人」以外の言葉を入れようとしてみたが、うまくいかない。物語構成の段階で、日本人の身長（身体的特徴）、日本人の噂や伝説（文化）など、民族という基準に従って組み立てられているのである。

そのことは、浅之進がこの後、小人島、長脚国、長臂国、穿胸国、蝦夷、琉球、もうる、ちゃんばん、そもんだら、ほるねら、はるしや、むすこうびや、べぐう、あらかん、あるめにあや、天竺、阿蘭陀、うてんつ国、きやん島、愚医国、ぶざ国、いかさま国、ちょぼいち島、朝鮮、夜国の国々を訪れる、という成り行きにも現れている。これらは中国の『三才図会』に出現する国々に、現実の国、架空の国を取り合わせたものだが、近代国家の概念ではない。国と

言っても法をもったいわゆる国もあれば、身体的特徴を言っているだけのもの、民族文化を表しているもの、島や地方の名称であるものなど、基準がさまざまだ。国の名称の基準が複数あるということは、「日本」「日本人」という言葉の意味にも複数の側面があることを意味している。つまり現代の私たちが言っている国家としての「日本」でもなければ、国民としての「日本人」でもない。むしろ、たまたま日本列島に暮らしているところの、中国人やヨーロッパ人ではない人間、という極めておおまかな意味なのである。

注目すべきは、それでも浅之進が一貫して自らを「日本人」と意識し、そう名乗ることだ。確かにそれまでも『国性爺合戦』のような、日本と中国を舞台にした物語には「日本人」という言葉が7回、「日本」という言葉は89回も出現する。『好色一代男』のようにすべてが日本で展開する物語でも、一回は「日本人」が出現する。長崎・丸山遊廓でのくだりだ。「日本人のならぬ事は是なり」とある。この言葉の前には中国人のことを、後にはオランダ人のことを述べている。中国人は催淫薬を使って幾度も遊女と枕を共にするが「日本人はこれができない」という意味だ。「日本人」はこのように、主に近世の日本人が接した外国人たちとの比較において強調される場合に使われる。相対的、関係的な概念だということだ。

浅之進は羽扇に乗って中国へたどり着く。そして乾隆帝の住む北京に至る。帝王は後宮へ忍び込んだ浅之進を見てその理由を尋ねる。浅之進は「我は日本江戸の者にて、深井浅之進と申す者なる」と名乗る。皇帝は珍しがって諸国の話を聞きたがる。その続きで皇帝は、「世界廣しとはいへども、我が唐土の五岳につゞける大山は有るまじき」と問いかける。浅之進はそれに対して以下のように述べる。

我が故郷の日本には、不二といへる名山あり。其大さ五岳にもはるかまさり、八葉の峰そばだちて、四時に雪の消ゆることなく、何れの国よりは是を見ても、白扇さかしまに懸ると、詩にも作り、「なかなかにいふ言の葉もなかりけり。不二の白雪、不二の白雪」などと、哥にも詠じ、風は人穴を出でて、三千世界を涼うし、雪は麓に落ちて、白酒と成つて旨がらす。五岳なんどのごときは、草履取にも不足なり。(平賀、1763)

皇帝は驚き、「是より諸国へ申し付け、多くの人歩（にんぷ）を呼び寄せて、不二山を築かせて、後世に名を残すべし」と、富士の築山を作ることを思いつく。さらに浅之進に富士の築山奉行を命じる。浅之進は日本へ帰り、富士山の雛形を取って来る、と言う。その雛形を作るために中国中の紙と粘土を取り集め、富士山を張り抜きにして、中国に築いた築山にすつぽりかぶせることを提案する。早速皇帝はお触れを出し、中国中の郡や県から紙と粘土を集めること山のごとし。経師屋や細工の名人も召し出し、浅之進は「不二山張抜太夫」という官位をもらい、日和を見定め、大船三十万艘一度に日本へ向かって船を出したのだった。

一方日本では、この話を知って急遽会議が開かれる。とは言っても人間ではない。富士の裾にある愛鷹山の神、曾我兄弟の神、伊勢八幡の神々から諸国の神々へ使いを出し、富士の頂上へ八百万の神が集まったのである。文字通りのサミット会議だ。議論は、「我守護の名山を、唐土へ写されては日本の恥なり」「昔蒙古より責め来りし時の先例に任すべしとて、雨に神風の神に命じて、急ぎちくらが沖に待ち請けて、唐（もろこし）の船を吹きくだけよ」等々、という名誉をテーマにした会議であった。

この富士の張り抜き話の中には、平賀源内の「権威」と「コマーシャリズム」に対する考えが端的に示されている。富士はすでに江戸と日本の象徴であり、ある種の歴史的、信仰的権威になっている。しかしそれは日本を形の上で象徴するだけであり、その内部には何も内実が無い。中国に作ろうという富士山はコマーシャリズムそのものであり、まるで土のかたまりの上に見かけだけをかぶせて客を呼ぼうとするテーマパークのごときものだ。権威に中身はないが、コマーシャリズムはもっと虚しい。源内は「日本」じたいを、その両方の側面をもったものとして、この作品の中に位置づけている。

また『風流志道軒伝』では、浅之進自身が「生きた日本人の見せもの」として商品化されている。「作物（つくりもの）こしらへものとは（違？）ふて、生の（しやう）物を生で見せる、御評判、御評判」と、娯楽の道具にされているのである。源内は自身も戯作を書き、浄瑠璃を作り、たばこ入れを作るなど、並の学者よりはるかにコマーシャリズムに近く、見世物界や出版界とも懇意で、その内実も知り尽くしている。しかしそれを利用しながらも、本意は別のとこ

ろにあった。この現象は現代でも同様で、マスメディアに乗らなければ思想は伝わらず、プロジェクトも実行できないが、しかしそうすることによって限りなく本意がずれてゆく。

源内はこの「ずれ」を、「国益」という言葉でさらに書いている。

「国益」の二つの意味

コマーシャルイズムに対するいらだちを、源内は「国益」との関係で、次のように書く。

我は綿羊を見て日本にて羅紗・らせいた・ごろふくれん・じよん・とろめん・へるへとあん、さるぜ毛氈類の毛織を織らせ、外国の渡りを待ず、用に給せんと心を碎き、人は手短に銭をせしめんと計る。いかに物いはぬ畜類じやとて、毛を織て国家の益にもなる物を、らしやめんなんどあてじまいな名をつけ、絵具で体を塗りちらし、引ずり廻して恥をさらす、綿羊の手前も気毒なり。(平賀、1777)

源内は実際に、高松で人にまかせて羊の飼育実験をしていた。その意図はここに書いてあるように、羅紗・らせいた・ごろふくれん・じよん・とろめん・へるへとあん、さるぜ毛氈類の毛織物、つまり輸入毛織物を国産に切り替えるためだった。

膨大な輸入品を徐々に国産に切り替えてゆく産業育成は、江戸時代の経済政策の柱である。その中心にいたのが本草学者たちであり、源内はそのひとりだ。この政策は決して新しいものではない。古くは和時計や鉄砲の制作から始まって、江戸時代には磁器生産、綿花栽培と綿織物、養蚕と各種絹織物、生薬各種とくに朝鮮人参の人工栽培、砂糖生産、中国書籍の印刷・出版、ガラス制作、レンズ制作等々、様々な分野で開発生産が進み、1763年もその途上であった。源内の言っていることは当時の幕府や諸藩の施策と矛盾するものではなく、もっともなことなのである。

しかしそれでも、ここで言う「国家の益」の意味は、大きな流れと異なるよ

うに思える。それはどうしてなのだろうか。

「日本」という言葉や「国益」という言葉の意味は、歴史上微細に変動する。政治的な場で使われるだけでなく、文学や社会思想で使われる概念でもあり、かなりその内容は錯綜している。たとえば「国益」の「国」は、「日本」のことを意味するとは限らない。国とは、たとえば諸国の風土記の場合、それぞれの地域のことをさす。古代には日本という概念そのものがないのである。国益という言葉が『紀伊続風土記附録』の紀実俊の解案にあり、それは1192年の文書であることを小学館『精選版・日本国語大辞典』が伝えている。文献上の初出かも知れない。しかしこの場合の「国」も日本ではなく、特定の地域のことであろうと思われる。

その流れとして、江戸時代の「国益」も「諸大名領国の商品生産・手工業生産における国産物自給自足の思想、藩経済自立化の思想を表す経済概念」（小学館『日本歴史大事典』）とされる。この場合の「国」は、やはり「藩」である。なお、現在使われている通常の百科事典における「国益」の項目には、近代国家成立以降の national interest としての意味しか記述されていない。

1822（文政5）年に書かれたと言われる佐藤信淵『経済要略』は、「経済トハ、国土ヲ経営シ、物産ヲ開発シ、部内ヲ富豊ニシ、万民ヲ済救スルノ謂ナリ」（佐藤、1822）という始まりで知られた書である。このくだりは「経済」がお金を稼ぐことではなく、経世済民、つまり人々を救うために存在する学問であることを明確にしている。佐藤信淵はこのくだりを、「故ニ国家ニ主タル者ハ一日モ怠ルコト能ハザルノ要務ナリ」と続けている。これらの文言の中にある「国土」とは藩のことである。「部内」は藩の領地のこと、「万民」は藩内の人々のこと、「国家」も藩のこと、「国家ニ主タル者」とは藩主のことである。幕府の長、つまり将軍も徳川家の藩主であり日本の長ではない。「一日モ怠ルコト能ハザル」と言っているので、ましてや天皇のことではない。このように「国」とは元来、大名領地のことをさし、国益とは確かに、『日本歴史大事典』が記述するように、諸大名領国の商品生産・手工業生産における国産物自給自足によって得られる利益のことを意味するのである。

しかし、源内は他の箇所でも次のように書く。

造化の理をしらんが為産物に心を尽せば、人我を本草者と号（なづけ）、草沢医人（やぶいしゃ）の下細工人の様に心得、已に賢（まさ）るのむだ書（がき）に浄瑠璃や小説（よみほん）が当れば、近松門左衛門・自笑・其磧が類と心得、火浣布・ゑれきてるの奇物を工（たく）めば、竹田近江や藤助と十把一トからげの思ひをなして変化籠（へんかりょう）の如き事をしらず。我は只及ずながら日本の益をなさん事を思ふのみ。或は適（たまたま）大諸侯の為に謀りし事ども、国家の大益なきにしもあらざれども……（平賀、1777）

ここには「日本の益」「国家の大益」という言葉が出てくる。これは「適（たまたま）大諸侯の為に謀りし事ども」が、国の益でないとは言えない、とあるように、「国家の益」が大名の益とは異なるものとして書かれているのであって、やはり源内は国益を日本全体の益の意味で使っている。

さらに言えば、このくだりには「造化の理」という表現もある。近松門左衛門、自笑、其磧、竹田近江、藤助は、当時で言えばスターだが、源内はそう見られることを拒否している。源内は「造化の理」を知るためと、「日本の益」になるように、自分を様々なかたちに変化させているのであって、エンターテインメントで生きて行こうというわけではないのに、そのような作家たちと同じに見られるのはいやだ、と言っているのだ。

一方では「国」は藩の意味であり、「国益」は藩益のことであった。江戸の市場に翻弄されないよう、藩内部の自給率を高め、自給自足状態に近づけることによって、藩経済を崩壊から守り、藩内に暮らす人々が豊かになるような政治をおこなうことが、江戸時代における藩士たちの役目だったのである。

しかし一方では、新井白石が貿易に使ってしまった金銀銅の鉱物資源の損失を計算し、それを何とかとどめようとしたように、同じ事が日本と外国との関係の中で考えられていた。どちらが先でどちらが後、ということではないのであろう。江戸時代の日本には二つの「国益」が存在したのである。

その二つの国益思想には共通点がある。外部を頼らないということだ。外国や外部から大量のものを購入することによって、大きな支払いをすることになる。また、購入するという行動によって、生産能力が育たない。藩の中でも日

本の中でも、自ら質の高いものを作る能力を磨くことで、支払い、とくに再生産のきかない鉱物資源の支払いを低くおさえる。そして、できるだけ狭い範囲で豊かさを行き渡らせる、という考え方だ。

佐藤信淵は「開発（かいほつ）」という言葉を使った。自然界にあるものの能力を引き出すことである。一方、平賀源内は「勿体なし」という言葉を使った。これは源内がエレキテルを修理・開発したときのことである。それを両国橋の見世物に出して大金を稼ぐよう助言した者がたくさんいて、それに対し、「陰陽の理を尽せし物を、勿体なしと合点」しなかったという。これが「もったいない」のそもそもの意味だ。本来、そのものの持っている価値を損なうような扱いをすることで、そのものの「勿体」が保てないようにしてしまうことを「もったいない」という。源内は自然が本来もっている能力（勿体）を引き出すことによって、それを金銭に換えるのではなく、むしろ金銭に換えない方法で（貿易に使わないで）、また外国から買わないで、日本の中に生きている人々の役に立てようとしたのである。

まさに「人は手短に銭をせしめん」とするのである。江戸時代でも、大都市江戸では現代と同じように、金銭を優先させる価値観が広がっていた。そのことに、佐藤信淵は江戸の市場に応じないという方法で、源内は江戸の価値観に応じないという方法で、国益思想を貫こうとしたのである。

「日本」にも「国益」にも複数の意味がある。それらをもって現代社会における「日本」「国益」の意味を、見直さなければならないだろう。

参考文献

- 佐藤信淵 1822年著『経済要略』岩波日本思想大系四五『安藤昌益・佐藤信淵』所収 1985年版 岩波書店
 スクリーチ、タイモン 2007年『江戸の大普請——徳川都市計画の詩学』森下正昭訳 講談社
 平賀源内 1763年『風流志道軒伝』岩波日本古典文学大系『風来山人集』所収 1975年版 岩波書店
 平賀源内 1777年『放屁論後編』岩波日本古典文学大系『風来山人集』所収 1975年版 岩波書店

<ABSTRACT>

Multiple Meanings of “Japan” and “National Interests”

TANAKA Yuko

In the Edo era, both “Japan” and “national interests” had two meanings. Generally, they meant “a feudal clan” and “the feudal clan’s interests”. On the other hand, Hiraga Gennai (1728-1779) used them to mean “Japan” and “Japanese interests” as in the present age.

However, Gennai’s “Japan” was different from the concept of modern nation Japan. Various countries and races are written about to different degrees in *The Biography of Shidoken* published in 1763; for example from constitutional states, ethnic cultures, to physical characteristics, or merely the name of islands or local areas. This suggests that the meaning of the words “Japan”, “Japanese” is multi-faceted. It is an extremely rough meaning of human beings who are not Chinese or European and who happen to live in the Japanese Islands.

The concept of “Mount Fuji without meaning” was written about in this story. In the Edo era, Mount Fuji held great authority, as well as being exposed to commercialism. It symbolized Japan, but on its reconstruction in China, was a commercial product also; a theme park for the audience as an appearance on a lump of soil. Hiraga Gennai evaluated “Japan” in this work as such a thing.